

2026 年 7 月 21 日 第 2 回 物流シンポジウム
—コンテナターミナルにおける陸海の結節の効率化—
屋井所長 閉会挨拶

加藤先生をはじめ、本日のパネルディスカッションにご参加いただいた 6 名のパネリストの皆様、誠にありがとうございました。本日は、大変有意義なパネルディスカッションと質疑応答が行われ、私自身も非常に多くの示唆をいただきました。閉会に当たり、あらためて本日の議論を踏まえ、感じたことを一言申し上げたいと思います。

本テーマは、3 年ほど前に、大森特任研究員から研究として取り組みたいとの提案を受けたことが出発点でした。私はもともと港湾の専門ではありませんが、海外の事例も踏まえ、日本においても陸海の結節の効率化施策を進める必要があるという問題意識に、大いに意義を感じました。そこで、加藤先生を委員長として、東京港・京浜港を支える多様なステークホルダーの皆様にご参画いただく委員会を立ち上げ、検討を重ねてまいりました。その成果を、本日のシンポジウムという形で発表できたことを、大変感慨深く受け止めております。

本日の議論の中でも、さまざまな手段や施策についてお話がありました。しかし、私たちが本当に目指すべきものは、個別の手段そのものではなく、日本の物流・港湾の競争力をどのように高めていくかという点にあると考えております。東京港は世界最大級の都市の中心に港湾機能が存在し、なお発展を続けているという現実があります。その重要な物流機能を、今後いかに持続的かつ効率的に維持・発展させていくかが、大きな課題です。

私自身、20 年ほど前には、羽田空港の拡張と東京港の機能拡充とを同時に最大限追求することは難しく、どちらかを優先的に考えるべきではないかと思っていた時期がありました。しかし、現在は、都市として両方の機能が引き続き求められている状況にあります。だからこそ、限られた空間と資源の中で、従来以上に高度な運営と連携が必要になっているのだと思います。

本日、大森特任研究員からも話がありましたように、「降ろし取り」はあくまで一つの入口であり、そこから港湾全体、さらには陸と海の接続の在り方そのものへと議論を広げていく必要があります。最終的に目指すべきものは、単なる個別改善ではなく、本来あるべき物流・港湾システムの姿を見据えた検討であると考えております。

その一方で、今回の検討を通じて、あらためて痛感したのは、港湾分野におけるデータの不足です。今回、Y2 ターミナル様から貴重なデータをご提供いただいたことで、ここまで具体的な分析成果を示すことができました。この場をお借りして、あらためて深く感謝申し上げます。

しかしながら、現実には、東京港で輸入された貨物が広範囲にトラックで運ばれ、また輸入港の特性として空コンテナの移動も数多く発生しているにもかかわらず、その全体像を十分に把握し、効率化を議論できるところまで、私たちはまだ踏み込めておりません。内陸部やインランドデポまで含めて考えるならば、コンテナの流動、ドライバーの稼働、物流拠点間の関係など、より広い視野での分析が必要になります。現時点では、まだ車両が入構した後の検証にとどまっているのが実情です。

当研究所には、本年 4 月から新たに物流を専門とする若手研究員も加わりました。分析能力に優れた人材もおりますので、今後さらに研究を深めていきたいと考えております。そのためにも、ぜひ他のターミナル事業者の皆様からも、研究目的でのデータ提供についてご協力をお願いできればと思っております。本日の質疑応答でもさまざまな論点が示されましたが、私どもとしても、まさにそこまで踏み込んだ研究を進めたいと考えております。

データ提供の難しさについては、もちろん十分理解しております。実際、私自身の研究室でも、20 数年前に成田空港周辺の航空貨物の流動を把握しようとした際、フォワーダー周辺に出入りするトラックの状況を調査しようとして、現場から強い警戒を受けた経験がありました。それほどまでに、物流や港湾の現場が厳しい競争環境の中にあることはよく承知しております。

それでもなお、日本の将来を考えるならば、プラットフォームづくりとデータ共有は極めて重要な課題です。2年前、宿利会長、大森特任研究員、辻本研究員とともに韓国・釜山のKMI（韓国海洋水産開発院）とのセミナーに参加した際、国が主導してプラットフォーム形成やデータ共有を進め、それを基盤に新たなアプリケーションやシステムづくり、さらにはスタートアップの育成まで含めて、総合的に取り組んでいる姿を目の当たりにしました。日本とはかなり異なる進め方であると感じたことを、今でもよく覚えております。

もちろん、海外の取組がすべて順調に進んでいるわけではありません。しかし、だからといって、日本は日本だから仕方がないと考えのではなく、海外もまた試行錯誤を重ねながら前に進んでいるという姿勢に学ぶことが重要です。日本もまた、現状に安住することなく、工夫と努力を重ねていくべき時期に来ているのではないかと思います。

まずは本日の議論を踏まえ、研究所へのデータ提供を通じて研究をさらに前進させ、得られたエビデンスを基に、より深い議論へとつなげていくことが重要です。同時に、本来最も期待したいのは、国土交通省をはじめとする行政が、今日の議論でも示されたような、CONPASの枠を超える形でのプラットフォームづくりや、データ共有・公開を促す仕組みづくりに、より強いリーダーシップを発揮することです。

その際には、競争力や効率化だけでなく、脱炭素といった共通の政策目標もあわせて見据え、関係者が同じ方向を共有できるスキームを構築していくことが重要であると考えます。そうした環境が整ってこそ、港湾物流の効率化と持続可能性の両立が、より現実的なものになっていくのではないのでしょうか。

少し長くなりましたが、本日は大変有意義な議論を行うことができ、私自身も大いに学ばせていただきました。ご登壇いただいた皆様、ご参加いただいた皆様に、心より御礼申し上げます。以上をもちまして、閉会の挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。